

## 2 秋まき小麦大豆畦間ばらまき栽培のポイント

### 【1】大豆畦間ばらまき栽培の利点

#### ① 耕起・碎土がない

9月以降に降雨が多い上川北部地域においては秋まき小麦のは種作業に苦勞することが多く、年次によっては遅まきになるなどが問題になっています。秋まき小麦大豆畦間ばらまき栽培では耕起・碎土がないことで、は種適期を逃しにくくなります。

#### ② 大豆の連作を回避できる

上川北部地域において大豆は、収益の高い作物として作付面積が増えています。しかし、連作ほ場が大豆作付面積全体の5割を超えており（図5）、ダイズシストセンチュウによる減収が問題となっています。この対策には輪作体系を見直すことが重要です。秋まき小麦大豆畦間ばらまき栽培を取り入れることによって秋まき小麦を輪作の中に取り入れることができ連作回避が期待されます。

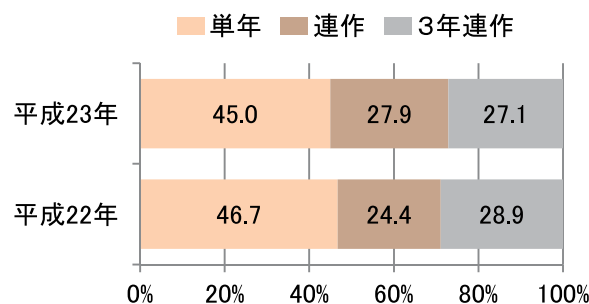


図5 大豆連作・輪作の割合（士別市A地区）

以上のような利点があることから、秋まき小麦「きたほなみ」の大豆畦間ばらまき栽培技術の定着のために上川農業試験場では、平成26年は種より士別市朝日町で実証試験を行っています。

### 【2】は種について

#### ① は種適期は9月上旬を目安とする

士別市の通常栽培「きたほなみ」のは種適期、すなわち越冬前に5.7~6.4葉確保できる時期は、9月9~15日を目安としています。大豆畦間栽培「きたほなみ」では大豆落葉前に行うのがポイントとなるので通常は種より少し早い9月上旬（大豆の葉が黄化した頃）を目安とします。尚、は種適期より極端に早い種は、ムギキモグリバエの発生が心配されます。

#### ② 適正は種量は、10、15kg/10a程度を目安とする（越冬前の目標茎数1,000本/m<sup>2</sup>）。

平成26年北海道の指導参考より大豆畦間栽培「きたほなみ」では、越冬前の目標茎数が1,000本/m<sup>2</sup>で、は種量は10kgを目安としています。また、15kgでは倒伏することがあります。しかし、越冬前の茎数が十分に確保できない条件下では、は種量15kgの方が10kg量より子実重が高い結果でありました（図6）。は種はブロードキャスト、ミスト機、タブラ等で均一に行います。

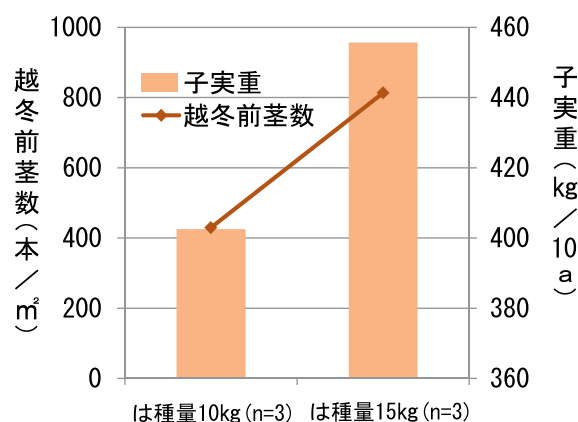


図6 は種量と越冬前茎数と子実重（士別市朝日町）

### 【3】窒素施肥について

#### ① 基肥は大豆落葉後までに

基肥は、は種時または落葉後に施用します。具体的には、化成肥料などで施肥（窒素

4、リン酸12、カリ9kg/10a)が標準です。ただし、泥炭土など地力が高いほ場では省略が可能です。また大豆葉、莖が還元されるので、ある程度省略できる可能性があり現地の実証試験で確認中です。

## ② 融雪後の窒素施肥は分肥が基本

大豆畦間ばらまき栽培においても「きたほなみ」の品種の能力を生かすために分肥が基本となります。

方法は、起生期－幼形期－止葉期に各6－4－4kg/10aを施用します(表4)。

ただし、起生期には莖数を調査し生育に応じた施肥をします。これは、㎡当たり莖数が多い時(1,800本を超える)は起生期2～4kg/10a程度に減肥し、少ない時(1,400本より下回る)は8～10kg/10a程度に増肥します。

表4 春以降の基本的施肥法

起生期莖数	追肥窒素量(kg/10a)			合計
	起生期	幼形期	止葉期～出穂直前	
	4月上旬	5月上旬	6月上旬	
普通(1,400～1,800本/㎡)	6	4	4	14
多い(1,800本/㎡以上)	2～4	4	4	10～12
少ない(1,400本/㎡以下)	8～10	4	4	16～18

## 【4】栽培上の注意事項

### ① 無覆土栽培である

無覆土栽培で大豆の莖葉が覆うことで発芽し、根が土壌に活着することで生育します。軽い砂壤土では、根が土壌に活着しない現象がみられ十分な株が確保されず根張りも悪いため、その後の生育も劣った事例がみられました。

### ② 雑草対策に注意する

スズメノカタビラ・スカシタゴボウが繁茂した例(図7)のように雑草対策も重要です。特に土壌処理剤が使用出来ないので、秋期の莖葉処理剤、春期の莖葉処理剤で、上手く除草する事が重要です(表5、6)。



図7 間作小麦畑の雑草

表5 秋期の莖葉処理剤

商品名	使用時期	使用量(10a当たり)	対象雑草
ガレース乳剤	1～3葉期	100～150ml	ハコベ、ナズナ、スカシタゴボウ、一年生イネ科雑草、スズメノカタビラ
エコパートフロアブル	2～4葉期	50～75ml	ハコベ、ナズナ、スカシタゴボウ

表6 春期の莖葉処理剤

商品名	使用時期	使用量(10a当たり)	対象雑草
エコパートフロアブル	止葉抽出前まで	50～75ml	シロザ、タデ類、ハコベ
MCPソーダ塩	幼穂形成期	300g	シロザ、タデ類、ハコベ、ナズナ、スカシタゴボウ
バサグラン液剤	幼穂形成期	100～150ml	シロザ、タデ類、ハコベ、ナズナ、スカシタゴボウ
ハーモニー75DF	幼穂形成期	7.5～10g	シロザ、タデ類、ハコベ、ナズナ、スカシタゴボウ

注) MCPソーダ塩を赤クローバ間作栽培で使用する場合は、赤クローバの本葉2葉期以降に使用する。

(農業研究本部 上川農業試験場 研究部 地域技術グループ 主査 沢口敦史)